様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１３５９０

研究課題名（和文）福島の沿岸漁業者が模索する「未来」に関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）In Search of Futures in Fukushima: An Anthropological Study on Coastal Fishing Families

研究代表者
高橋　五月（Takahashi, Satsuki）

法政大学・人間環境学部・教授

研究者番号：５０７９１０８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、福島県および茨城県にて複数回実施した現地調査を通して、2011年に発生した福島第一原発事故が沿岸漁業にもたらした影響とその影響下で「未来」を模索する沿岸漁業者たちの姿を明らかにした。また、文化人類学者たちがこれまで議論してきた「未来」、「環境」、「災害」に関する先行研究を参考にしながら、原発事故後の海ににおいて、これらの概念がどのように絡み合い、作用し合っているのかを明らかにした点が本研究の成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、今後も生業の場として原発事故後の福島沿岸で生き続けようと奮闘する漁業者を対象に、彼らが模索する「未来」について検討する。福島原発事故という国際的な注目を集める事例において、「試験操業」という未来が不確定な期間に詳細な人類学的現地調査を通して「未来」を模索する実践と変容過程を具体的に明らかにする本研究の意義は学術的だけでなく社会的にも大きい。

研究成果の概要（英文）：Through conducting ethnographic fieldwork for multiple times in Ibaraki and Fukushima Prefectures, I was able to grasp various forms of the future, which coastal fishing families imagined and searched for, as they muddled through in the aftermaths of the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident. In addition, through engaging with existing anthropological literature, I was also able to advance my theoretical understanding on how the future, environment, and disasters are entangled in the time of the Anthropocene.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学　災害　環境　漁業　日本　未来

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究開始当初の 2017 年は、2011 年に発生した東日本大震災から 6 年が経過した時期だった。申請者は、東日本大震災発生以前から東日本地域の沿岸漁業を対象に環境人類学的研究を行っていたが、2011 年以降は震災が沿岸漁業に与える影響についての調査も行っていた。具体的には、東日本大震災以前に茨城県沿岸地域で行った調査研究では、1 年間の長期的現地調査（2006-2007 年）をもとに、第二次世界大戦後から絶え間なく実行されてきた沿岸漁業の「終わらない近代化（unending modernization）」の歴史、また近代化政策のもとで開発され、変容した海洋環境と共に生きる漁業者たちの日常を描いた民族誌をまとめた。そして東日本大震災発生後の 2011 年 4 月から行った調査研究（2011 年 4～8 月、2014 年 6～8 月、2015 年 7～8 月）では、地震と津波による被害だけでなく福島第一原子力発電所の事故に伴う魚介類の放射能汚染や風評被害に苦しむ福島県と茨城県の沿岸漁業者の現状を経年観察していた。

そして、震災から数年経過した 2014 年、2015 年に行った調査では、被災した沿岸漁業の復興政策において、再び「近代化」がキーワードとして取り上げられ、近代化することによって沿岸漁業の未来をつくることができる、という未来派的言説（discourses of futurism）を多く耳にした。しかし、沿岸漁業者への聞き取りでは、こうした政策キーワードとしての「未来」に対し、彼らは往々にして距離を感じると告白した。福島県のある漁業者は、政策で言われる「未来」と自分の「未来」は別ものだ、とも語った。では、彼らは「未来」についてどのように考え、模索しているのだろうか。この疑問をきっかけに、福島沿岸の「未来」について漁業者の視点から探究するために計画したのが本調査研究であった。

２．研究の目的

上述のように、東日本大震災をきっかけに「未来」という言葉は多くの注目を集めるようになっていたが、同時に「未来」は文化人類学者たちの議論にも頻繁に登場するキーワードでもあった。このことから本研究は、特に関連の深い３つの研究フィールドに注目し、先行研究にならいながら原発事故後の漁業者の「未来」について検討しつつ、「未来」に関する人類学的議論の更なる発展を図ることを研究の目的とした。それぞれの研究フィールドをもとにした具体的な研究目的は以下の通りであった。

（１）災害の人類学（Anthropology of Disaster）

災害を研究する人類学者たちは、これまで時間性の重要性について注目し、災害の歴史性や災害発生後の経年変化について現地調査をもとに具体的な議論を展開してきた［Hoffman and Oliver-Smith 2002、木村 2013］。しかし、これまで「未来」という時間軸については十分な注意は払われていない。かつてインドのボパール化学工場事故について研究した Kim Fortun[2015]は、最近の著書で、汚染物質を取り込んだ身体が将来的なリスクと共に生きる様子を例に挙げ、「未来」は「現在」に同居しており、民族誌的調査対象として探求する必要があると訴える。この Fortun の議論を参考に、本研究は、現在福島沿岸で不確定な放射能リスクと共に生きながら、「未来」を模索する漁業者を対象に、「未来」についての民族誌的理解を深める。

（２）未来の人類学（Anthropology of the Future）

上述した Fortun の「未来」に関する議論は、Arjun Appadurai[2013]が提唱する「未来の人類学」に呼応する。Appadurai は、文化人類学者たちはこれまで時間性に敏感ではあったが、「現在」と「過去」という時間軸に比べて、「未来」についての民族誌的研究は少なかったことを指摘する。また彼は、特に環境汚染は地球の未来に深く関わる問題であり、「未来の人類学」が注目すべき調査対象であると言う。しかし、近年「未来」をテーマとする文化人類学的研究への注目が高まる一方で、環境汚染の事例を通して「未来」について民族誌的に検討する研究論文はまだ殆どない。本研究は、原発事故後の福島沿岸を調査対象とし、「未来」を模索する漁業者たちの実践と過程を明らかにすることで、「未来の人類学」に対し、具体的な事例研究を提供する。

（３）環境人類学（Environmental Anthropology）

「地球の未来」に関する議論は、これまで環境人類学者たちの間で多くされてきた。しかし、応用人類学の立場から、環境と人の持続的関係を構築するための具体的な政策提言をすることは多かったが、「未来」という政策キーワードを批判的に捉えた議論は少ない。そこで、本研究は、政策キーワードとしての「未来」に疑問を持ちながら、自らの未来を模索する福島漁業者に注目する。加えて、近年研究蓄積が著しい科学知と未来予測についての先行研究［猪瀬 2013］にならいながら、試験操業の結果や福島沿岸水域の放射能汚染について調査研究をする海洋科学者との交流が沿岸漁業者が模索する「未来」に与える影響について検証する。

【参考文献】

Arjun Appadurai (2013) The Future As Cultural Fact: Essays on the Global Condition. Verso.
Kim Fortun (2015) Ethnography in Late Industrialism. In Writing Culture and the Life of Anthropology. O. Starn, ed. Pp. 119-136. Duke University Press.
Susanna M. Hoffman and Anthony Oliver-Smith, eds. (2002) Catastrophe & Culture. SAR Press.

木村（2013)『震災の公共人類学 ： 揺れとともに生きるトルコの人びと』世界思想社。
猪瀬(2013)「放射能が手に届いた気がしたんだ」『文化人類学』78(1):81-98.

３．研究の方法

本研究では、文献研究に基づく「未来」という時間軸についての理論的検討を行いながら、福島県および茨城県の沿岸漁業者を対象に、試験操業や海洋科学者との交流を通して「未来」を模索する実践と過程について現地調査を行った。具体的には、本研究開始以前から震災後の漁業復興に関する聞き取り調査を通じて関係を形成した人々を中心に現地調査を実施し、聞き取りと試験操業や海洋科学者との交流の現場において参与観察を行い、「未来」を模索する実践とその変容過程を明らかにした。

また現地調査を重ねる一方で、研究成果を論文にまとめ、国内外の学会および講演会等で発表し、フィードバックを得ることで理論研究の発展を図った。

４．研究成果

以下には、研究開始当初に本研究で達成目標としていた項目をもとに、本研究終了時点で何をどこまで明らかにできたのかを具体的に示す。

（１）「未来」と「過去」・「現在」の関連性についての理論的検討

近年注目を集める「未来」という概念だが、民族誌的事例研究をもとにした議論はまだ少ない。本研究は、時間の人類学における先行研究を広くレビューし、「未来」が「現在」および「過去」という時間軸と関連しているのかを整理しつつ、福島漁業者を対象とした人類学的調査で得られたデータと照らし合わせ、具体的な見解を示した。

（２）試験操業という「未来」を模索する実践と変容過程

福島の漁業者は 2021 年度末まで続いた試験操業を重ねながら、漁業者として生き残る未来を模索した。試験操業期間は、魚介類の放射線モニタリング検査を継続しつつ、「風評被害」の状況を把握し、将来的にいつの時点で本操業が可能になるのかを見極める作業だった。現地調査では、沿岸漁業者への聞き取り調査に加え、試験操業やモニタリングのための操業における参与観察も実施し、漁業者が「未来」を模索する実践と変容過程を明らかにした。試験操業は 2021 年度末に終了し、2022 年度には本操業への移行期間が開始したが、福島第一原発の処理水の海洋放出が 2023 年度に予定されていることから、沿岸漁業者にとっての「未来」は不安定な状況が継続する。

（３）海における放射能汚染に関する科学知と「未来」の模索との関連性

海・魚の放射能汚染に関する実態解明は国主導の研究だけでなく、いわき市内の福島県水産試験場及び水族館アクアマリンふくしまの海洋科学者も独自の調査研究を行い、漁業者や一般市民への情報提供を行ってきた。本研究では、科学技術論に関する「市民科学」についての先行研究にならいながら、漁業者たちがどのように科学知を参考にしながら「未来」について考え、語るのか、聞き取りと参与観察を通じて、その過程を明らかにした。しかし本研究期間では、福島県水産試験場及び水族館アクアマリンふくしまの海洋科学者における現地調査が限定的な範囲でしか実施できなかったため、今後の調査研究に繋げたいと思う。

以上の研究成果は、日本国内および国際学会にて口頭発表することに加え、査読付き投稿論文および編著本の分担章として出版した。また 2023 年 7 月には、本研究以前からの調査研究の成果と本研究の成果をもとに執筆した単著本『Fukushima Futures: Survival Stories in a Repeatedly Ruined Seascape』が University of Washington Press から 2023 年 7 月に出版される予定である。この出版は University of Washington Press の環境人類学シリーズ「Culture, Place, and Nature」の一部であり、これを機に文化人類学、環境学、アジアンスタディーズ、日本研究の分野に関係する研究者および学生、またこれら分野に関心をもつ一般読者に向けて、本研究の成果を広く発信できることを期待している。また本書は、アメリカの学術団体である The Association for Asian Studies（アジア研究協会）がアジア圏に関する初出版単著本に与える出版助成賞「First Book Subvention Program」を受賞した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 高橋五月	４．巻 82(3)
２．論文標題 福島沖に浮かぶ「未来」とその未来	５．発行年 2019年
３．雑誌名 文化人類学	６．最初と最後の頁 441-458
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　8件）

１．発表者名 高橋五月
２．発表標題 Conspiracies and Coalitions in Japanese Environmental Humanities
３．学会等名 Association for Asian Studies（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Satsuki Takahashi
２．発表標題 From Post-Hiroshima to Post-Fukushima: Japan’s Unending Modernization at Sea
３．学会等名 The Oceanic Japan Conference（国際学会）
４．発表年 2019年～2020年

１．発表者名 高橋五月
２．発表標題 The Reconstruction of Fukushima fisheries
３．学会等名 Meridian Summit（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋五月
２．発表標題 In Search of “After Fukushima”: An Ethnography of the Japanese Anthropocene
３．学会等名 AAS 2018 Summer Workshop on Asia and the Anthropocene（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋五月
２．発表標題 Like an Octopus: The Craft of Fishing in the Anthropocene
３．学会等名 American Anthropological Association（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高橋五月
２．発表標題 From Post-Hiroshima to Post-Fukushima: Living with the Troubled Ocean in Japan’s Unending Modernization
３．学会等名 Association for Asian Studies（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 高橋五月
２．発表標題 福島沖に浮かぶ「未来」とその未来について
３．学会等名 日本人類学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 高橋五月
２．発表標題 “After Fukushima” in Suspension
３．学会等名 American Anthropological Association（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 高橋五月
２．発表標題 Before “After Fukushima”
３．学会等名 Association for Asian Studies（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 高橋五月	４．発行年 2020年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 448
３．書名 地域の危機・釜石の対応　―多層化する構造―	

１．著者名 Hirokazu Miyazaki, Yuki Ashina, Satsuki Takahashi, Nobuyo Fujinaga, M. X. Mitchell, Sonja Schmid, Annelise Riles, Dai Yokomizo	４．発行年 2020年
２．出版社 Northwestern University Libraries	５．総ページ数 167
３．書名 Nuclear Compensation: Lessons from Fukushima	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Nuclear Compensation: Lessons from Fukushima
https://nuclear-compensation.northwestern.pub

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関